

親鸞の人格及び其の首張

鶯尾順敬

親鸞の事蹟は今日に於ては甚だ明瞭を於いて居るのであるが、實は其の研究が未だ徹底してゐないものと謂はねばならぬ、今日までは本願寺專修寺に傳へられてゐる傳記類がその根本となつてゐる、然し其の傳記類は専門家から史的價値に乏しいものとせられてゐるもので其の他に當時の文献の上に親鸞の事蹟は現はれて居るか、どうかと云ふに、更に見る可きものが無い、それで親鸞の事蹟が明瞭を缺くこととなつたのである。

然し乍ら古來有名なる高僧にして當時の文献に事蹟を留めないものが少なくないので、獨り親鸞の場合のみではない、その高僧の著述といふものがあらばそれより研究を進めて人格首張等が發揮せられねばならぬ。

親鸞の傳記類で、本願寺專修寺に傳はるものは、嚴密なる批判を要するのである。それは本願寺三代の覺如の永仁三年に作つたものである。永仁三年は親鸞の滅後三十三年であつて、時代も未だ大に隔つ

てゐるものでない、且覺如は親鸞の末女の方から血統を受けてゐるのである、されば、これらの点から見てこの親鸞の傳記は、寧ろ信重せられねばならないものでなければならぬ、然るに却て史的價値に乏しいとせらるゝのは何か、その間に事情が伏在して居るのである。先づこの點が説明せられねばならぬ、覺如は實は本願寺の創立者である、覺如が一代の事業は本願寺の創立にあつた當時外は諸宗に對し法然門下の諸派に對する關係があり内は親鸞門下の東國の諸弟子に對する關係があつた當時親鸞より直接教へを受けた東國の諸弟子が専修寺を中心として活躍せるに對して覺如が京都に於て本願寺を創立するには大に苦心したものである。この事業經營上の必要から親鸞の傳記を作つたものであると見らるゝのである。この見地から親鸞の傳記に眼を移せばよく解釋せらるゝのである。

先づ親鸞が法然の正嫡の弟子であることを強説し實は阿彌陀佛の化身であつて妻は觀音の化身であると云ふことを盛説してゐるその親鸞を以て法然正嫡の弟子となしたるは即ち法然の門下の諸派に對する關係を語り、阿彌陀佛の化身であると云ふのは東國在住の親鸞門下に對し自ら化身の子孫たるを叫びんがためであつたと見らるゝのである。覺如は其の晩年になつて更に口傳鈔を著作したのであるが、これは親鸞の逸事を記したもので傳記を補修するものとして見らるゝのである。親鸞の傳記はこれによつて完成しようとしたものと見られる。

乃で親鸞の傳記は本願寺聖人親鸞傳繪の原本及び原本同程度のものが現存してゐる。口傳鈔は康永二

年即ち覺如の没後十年にして乘專が寫筆したるものが現存してゐるもので一々考証せらるゝのである。

しかし乍ら果して此の如き意味よりして覺如が親鸞傳記を作つたものであるならば、その本願寺と對峙せる專修寺に、その傳記の傳へられてゐるは奇異なることであるが、これは專修寺の方で本願寺の覺如の作つたものを仕入れたのであつて、口傳鈔も同じ意味で仕入れたのである。但し專修寺の方で覺如の作つたものとはなさず少し修正してゐる、寧ろその反對側のものを仕入れて流用してゐるのである。

されば、親鸞の傳記が歴史的に否定さるべきものでない、史的價值に乏しいのは一面の理由があるのである。今日親鸞の事蹟が明瞭でないといふのは、かゝる目的のうちにも收められて修飾のあまり實際の消息が影を絶つたものゝ如くなつたので、決して絶對的に明瞭ならざる理由を有するものとは考へられない、寧ろ史的研究の結果は十分にこれを明瞭ならしむるにいたるであらうことが豫想せられるのである。

然るのみならず親鸞は親らの著述を遺して居るのであつて、これにも幾分の疑問が附帶してゐるとせられてゐる、然し今後の研究は親鸞の事蹟に反つて不明を來すが如き結果とはならないで必ず親鸞の人格首張等が發揮せらるゝことが信せられる。

親鸞の一生は九十年にして其の經歷は頗る長い、而しこれは大略三時期に區分して考ふ可きであらう。

その第一期は京都に在つて修學したる時代であつて、京都に生まれた親鸞はそれより三十餘年の間比叡山等に於て修學した。この時代に平氏が没落して源氏が興起したのであつて、政治上にも社會上にも大激變があつた親鸞には目のあたり強き印象を刻みつけたのである。その第二期は北國に流罪せられ東國を流浪した時代である。この生活も約三十年間を見ることが出来る。親鸞はこの期を越後に數年、出でて信濃、上野に渡り、下總、常陸、武藏、相模を歴巡して教化に盡した。そして中央政權の狀況は源氏より北條氏に移つて居る。實朝將軍が虛位を踏んで幕府に在り、忽ちに弑せられて北條氏が勃興し、義時が跋扈するにいたる——この變遷は親鸞が東國にあつて目撃したのであつて、この社會狀勢に接した親鸞が生涯の中心期をなした。後親鸞は京都に歸るのであるが、この晩年の卅年間には彼が一生を劃すその第三期に當る、しかしこの時は承久の亂以後であつて京都の公家の勢力は衰微し、鎌倉の武家の勢力に壓迫せられてゐた親鸞が晩年期は寂寞として聞えなかつたが、然し注目すべきことはこの期にいたつて親鸞が京都にあつて靜に著述に耽つてゐたことである。

親鸞の生活を以上の如く三期に分つて考ふるにその一生は始ご常人の三倍もありしかの觀がある、當時は殊に政治上にも社會上にも變化が激烈であつたのであつて、平氏の没落、源氏の興起また慌しくも北條氏の跋扈——親鸞はこれらを京都より北國東國流浪にかけて親しく見聞したのであつた。平氏の没落が宗教方面にも一大變化の時期を劃したものであつた、平安朝の末葉より京都を中心にして勃興した淨

土教の思想は、現在を厭離して來世を欣求したものであることは淨土教者の鼓吹のみならずして亦實に平安朝の末期の時代思想傾向に乗じたもので、京都の公家の勢力の陵夷衰微には幻滅の悲哀があつたのである。諸國への武士が競興して公家の領地を掠奪し、公卿の財政が破壊せらるゝことゝて公家は大に窮迫してゐた、そのクライマツク人を捕へて容るゝものが法然の淨土宗開立の現象であつた。此際法然の門弟の一人として親鸞が後を受けたのである。法然は流罪に逢ひ再び京都に歸つたが、しかし形勢一變の社會環境に處して淨土の上に新勢力を加ふるために一方の開拓をなすに至らずして入寂したので一段落を告げたのである。然るに親鸞にいたつては北國から東國に入り、京都の公家の境遇とは全く反對の武家の境遇に接したのである、即ち勃興氣運の東國の環境に應したのである。法然の環境と正反對に親鸞の環境がある。これが親鸞の活躍中心期をなしたのである。要するに時代環境を解釋せずしてはその事業が解釋せられない。

法然の首張も時代を離れて考ふべきものでない、親鸞が宗教家たる意義はその環境を離れないところにある。此見地よりすれば、法然の環境とは全く別な環境に在つた親鸞に親鸞の主張があるべきである。法然の淨土宗に異つた親鸞の淨土眞宗が開立せられたのである。淨土眞宗は即ち淨土新宗であつた。

親鸞の傳記を作つた覺如は、親鸞を以て法然正嫡の弟子となすに全力を盡した。それは覺如が事業のためであつて法然の門下の諸派に對し覺如が取つた至當の努力であつた。この際親鸞の事業を大成せん

が爲めには勢ひ法然の正嫡であることを強説する必要があつたのである。然るに後世親鸞の首張が何等の独自の點がないを見做し、今日に尙然るが如く考へて居るは以て實際の消息を知るものではない。親鸞の首張は法然より離れて居る。法然の浄土宗に對して親鸞の眞宗は異なるのである。親鸞は独自のそれを有するものである。法然を相承して法然より足一步も出でざりし親鸞なりしが如く云ふ者のあるのは親鸞を侮辱するものである。

法然の首張は選擇集に見え、親鸞の首張は教行信證に見えるのである。二書を比較するに誰か兩者の相異を認めないものがあらう。法然の首張が道綽、善導の教説に發し、親鸞の首張が天親、曇鸞に準備を置いて居るはその首張の根本に相異の存するを思はしめる。親鸞は始め綽空、善信と稱したが、これは法然の選擇集に引かれたる道綽、善導、源信等に私淑したものであることが示されてゐる。且つ綽空の空は法然の諱、源空の空を取つたのである。然るに北國東國にあつて改めて親鸞と稱したことは天親、曇鸞の一字づゝ取つたものでゐる。この改名が親鸞が自ら一家の境地を開拓したことを語るものとあると見られ頗る興味多きものである。その哲學の組織に就いてもその教化の機關に就いても大に相異がある。法然の教化の機關である來迎曼荼羅は念佛の行者が浄土に來迎さるゝを示したものであるが、親鸞の攝取不捨曼荼羅は現世にて光明のうちに攝取せらるゝとを示したものである。こゝに從來の浄土教の教化に革新を齎らして居るのである、即ち眞宗は阿彌陀如來の光明に照され現世に於て攝取せらるゝことを示したものの

である。親鸞の教化の機關である攝取不捨曼荼羅は後に出づる日蓮の十界曼荼羅に類してゐるものである。親鸞は歸命盡十方無碍光如來の光明によつて現世乍らに攝取せらるゝことを描き現はしたのである。親鸞の人格は著述によりて知らるゝのである。即ち教行信證に自分の流罪の事情を記して南都興福寺の僧侶の讒訴によつて理由なく罪科に處せられたことを憤懣してゐる。親鸞の宗教的人格は俗的勢力に屈伏するを肯んせなかつた所に見らるゝのであるが、この点も後の日蓮に類してゐる。親鸞は興福寺等に對して滿腹の不平を抱持し何人と雖も自己の精神生命を侵すべからざることを強調してゐる。京都に晩年を過したる時代は、阿彌陀如來の慈悲の光明に浴して平和の生活をなしたやうに見られる。この間に和讃の類三百首を製作したのである。これはまた注目に値すべきことであつて一種今様体の韻文を以て詩的節奏をたへたるもの三百首の多きに及んだのである。親鸞は熱烈なる宗教家であると同時に崇高なる詩人であつた。

かく見て來れば、親鸞の歴史的人格はたゞに明瞭を缺くとのみの問題に留らずして研究の興味を呼び起すのである。自分は親鸞の首張及び人格をかくの如き態度にて研究し、之を史上の一人物として發揮したい。即ち眞宗の祖師たる親鸞としてよりも、之を日本文化史上の一人格として研究し發揚したいのである。

(本篇は本會に於いて講演の後再びその二部回の大要を口授して筆記せしめたものである至極粗畧に失したるを懺謝す、願敬識)

論語衛靈公第十五篇

子曰く、

衆之を惡むとも必ず察せよ。

衆之を好むとも必ず察せよ。

(第二十七章)